

紀末から四世紀にかけての皇帝たちが語られつつ、ローマ帝国における一神教世界への転換という大きな精神的变化が論じられる。ただ『ローマ人の愛と性』(講談社)あるいは『多神教と一神教』(岩波書店)といった近著において、著者はこの問題に関し多様な視点から積極的な議論を展開しているが、それを了解した上で本書を手に取った読者は、割かれている紙幅は少なすぎるという印象を持つたのではなかろうか。そして最終第一〇章、ローマ帝国の滅亡を取り扱う中で著者は、「西ローマ帝国」という政治勢力が消滅する時代をそのまま古典古代文明の没落・終焉として見る従来の視点に対し、民衆の心性に注目しつつ、その時代を新しい秩序を生み出していく変化の時代として見る近年の古代末期社会論を対置させ、本書の叙述を締め括っている。

が広く読まれている事実に言及している。本書の執筆にあたり、塩野氏の著作の存在も念頭にあつたようである。歴史専門書の読者層は細る一方であると言われて久しいが、その傍らで多くの一般読者がローマ史への強い関心を示している。もしかしたら本書は、塩野氏が突き付けたこの現実に対しての、ローマ史家としての一つの回答なのかも知れない。

(志内一興)

マージヨリ・リーヴス著／大橋善之訳

### 『中世の預言とその影響 ——ヨアキム主義の研究——』

八坂書房 二〇〇六・一〇刊  
菊 七三三頁 九八〇〇円

は、歴史的人物としてのヨアキムの生涯とその著作に見えるヨアキムの思想、そして近世に至るまでのヨアキムに対する外部評価の道筋をつける。リーヴスは、中世盛期における預言文学の精華である『符合の書』、『默示録註解』、『十玄琴』というヨアキムの三大著作のみならず、その詳密な思考を図像化したと考えられる、かの『形象の書』も含めたヨアキムのあらゆる著作群を丁寧に読み込み、ヨアキムに内在する靈性と思考の様態を抽出する。ヨーロッパ中でも広く知られている。しかしながら、著者リーヴスがこの特異なる修道院長の研究に着手した一九二九年、ヨアキムの名は第一部をもって単著として切り出すことすら可能である。

## 新刊紹介

一一一(四二)

しかしながら、「中世の預言とその影響」と銘打った本書の本書たるゆえんは、第二部以降が担っている。第二部「新しき靈の人々」では、ヨアキム自身からはいっただ距離を置き、ヨアキムの預言的歴史解釈を共有するヨアキミストが展開した思想を総覽する。ヨアキムの生きた十二世紀は、ヨーロッパ的靈性の展開にあって一つの画期となることは周知の事実であるが、続く十三世紀は教皇権の伸長とともに、靈性の担い手である修道会が叢生した時代である。ドミニコ会士やフランシスコ会士といった托鉢修道士だけではなく、フラティック・エツリのような民衆宗教運動や、さらにはドルチーノ派といった教皇権より異端の烙印を押されたセクトを含め、十七世紀のイエズス会士に至るまで、リーヴスは目を配る。

第二部が宗教システム内部におけるヨアキム主義の展開に限定されていたのに対し、第三部と第四部は、中世後期のヨーロッパ世界を俗的側面と聖的側面から差配して、二つの無境界権力、皇帝権ならびに教皇権とヨアキム主義の関係を論じている。第

三部「アンチキリストと最終世界皇帝」では、中世後期から近世初頭にかけてのテクストを辿りながら、「この世の革新」という政治的理想を掲げる皇帝権力がヨアキム主義の中でどのような扱いを受けてきたのか、その変遷を整理する。中世前期の段階で、フランスでは「第二の一のシャルルマニュ」を、ドイツにおいては「最終皇帝」を待望する思想が形成されていたことは確かであるが、それは中世盛期のヨアキム主義と結合することで、加速度的に現実政治とのリンクを深める。とりわけフリードリヒ三世の死、シャルル八世の台頭、カール五世の治世へと続く十五世紀から十六世紀への転換点は、この最終皇帝思想が極度の高まりを見せる時期となる。

第四部「天使的教皇と世界革新」では、ヨアキム主義の利用を論じている。十四世紀には教会大分裂という、ヨーロッパキリスト教史にとって大変なインパクトのある事件と前後して生まれたのが、世俗権力と協同して「世界の革新」をすすめる天使的教皇の觀念であった。中世後期にはこの天使的教皇を占める者ではなく、長年ローマに生活する在野の研究者である。彼は、ウェブ上

三部「アンチキリストと最終世界皇帝」では、中世後期から近世初頭にかけてのテクストを辿りながら、「この世の革新」という政治的理想を掲げる皇帝権力がヨアキム主義の中でどのような扱いを受けてきたのか、その変遷を整理する。中世前期の段階で、フランスでは「第二の一のシャルルマニュ」を、ドイツにおいては「最終皇帝」を待望する思想が形成されていたことは確かであるが、それは中世盛期のヨアキム主義と結合することで、加速度的に現実政治とのリンクを深める。とりわけフリードリヒ三世の死、シャルル八世の台頭、カール五世の治世へと続く十五世紀から十六世紀への転換点は、この最終皇帝思想が極度の高まりを見せる時期となる。

以上のような内容を持つ本書は、中世後期ヨーロッパ世界の複雑な歴史展開は、国家間やセクト間のパワー・ポリティクスのみで説明されるわけではなく、成就されるべき預言という思想が彼ら中世人の行動様式の根底に伏流するがゆえに、他に類を見ない特異な様相を呈していたことをわれわれに教えてくれる。日本ではほとんど論じられないことのない一般史と思想史、政治史と宗教史をつなぐ貴重な成果として、本書の価値は不動のものでありつづけるだろう。

最後に品位ある訳文によって本書の価値を一層底上げした訳者について触れておきたい。大橋は必ずしもアカデミック・博士を占める者ではなく、長年ローマに生活する在野の研究者である。彼は、ウェブ上

で「ヘルモゲネスを探して」(<http://blog.livedoor.jp/yoohashi4/>) と表題するホームページを主宰し、中世から近世初頭にかけての神秘思想や自然哲学にかかわる膨大なテクストを原典から邦訳し紹介している。日本における西洋中世思想研究は、どちらかといえば認識論や存在論への関心が主流を占めていたように思われるが、大橋が掬い上げるテクスト群は、西洋中世の世界認識を知るために不可欠なものもある。

本書に関心をもたれる向きは、あわせて参考すべきである。当該分野が一層の隆盛を迎えることを祈念する。  
（小澤 実）

- ① 遠藤泰生編『植民地時代 一五世紀末――七七〇年代』二〇〇五・一〇刊 三九八頁
- ② 荒このみ編『独立から南北朝戦争まで 一七七〇年代――一八五〇年代』二〇〇五・一〇刊 三七〇頁
- ③ 佐々木隆・大井浩二編『都市産業社会の到来 一八六〇年代――一九一〇年代』二〇〇六・三刊 四二二頁
- ④ 有賀夏紀・能登路雅子編『アメリカの世紀 一九二〇年代――一九五〇年代』二〇〇五・一〇刊 三六一頁
- ⑤ 古矢 旬編『アメリカ的価値観の変容 一九六〇年代――一〇世紀末』二〇〇六・一二刊 五〇三頁

東京大学出版会  
A5 各四五〇〇円

本書は五〇名以上の研究者が参加し、コロンブスの航海日誌から九・一一テロ後のブッシュ大統領の演説までを新訳で収めて解説を付した、五巻組みのアメリカ「文化史」史料集である。文化は芸術作品から日

常生活・政治経済まですべてにあらわれる

「史料で読むアメリカ文化史」（全五巻）  
亀井俊介・鈴木健次監修

とし、その「あらわれ方」に着目して「本質」を探ろうと、小説・絵画・俗謡から奴隸法・移民法の条文、第二次大戦以降の対外政策の史料まで、柔軟に史料を選択・収録している。中でも、社会の女性観から様々に距離をとって自己の可能性を追求した女性を、文化の重要な手がかりと見て、女性運動に收まらない例も含め、多数紹介している。

各巻は巻頭の概説で、それぞれの編集戦略を表明している。第一巻『植民地時代』は概説で、植民地時代を独立前史ではなく、先住民・ヨーロッパ人・アフリカ人の遭遇の時代と見なすべきと主張し、それら三者の「ライフ」の紹介に力点を置く。奴隸に関する史料が比較的充実しており、また回心体験ナラティヴの収録は特筆に値するが、全体的にはピューリタンとフランクリンの史料が多い。ブリテン帝国の一員としての植民地人の葛藤については、革命関係の史料に独立反対派の史料も入れて配慮している。独立宣言から女性の権利運動、奴隸制度廃止論・擁護論、黒人送還論までを取り